

ペルソナ6 cyber
heaven

unknownname

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「――ダークウェブよりもっと深い、深層にある『偽りの天国』を見たことある?」
留学生としてアメリカ東海岸に位置する大都市「ニューミニッツ」にやって来た「井上 修也」は学校で知り合った友人から、『深層ウェブ』の更に深いところにある『偽りの天国』についての話を聞き、供に調査を行う。

※この物語はフィクションです。

実在する団体、組織、人物などとは一切関係ありません。

目次

序章 偽りの天国

- 1 プロローグ 大都市ニューミニッツ

序章 偽りの天国

プロローグ 大都市ニューミニッツ

『この声が聞こえるでしょうか…』

『シナリオ運命に抗いし “トリックスター” よ』

『 “最後の審判” …世界の終焉は間もない』

『どうか、貴方の愛した “穢れた世界” を救ってください』

…

…

…

——2019年9月 アメリカ合衆国 エディカナ州「ニューミニッツ」

「お客さん観光ですかい？」

タクシーの運転手が気さくに話しかけてくる。

「いえ…留学で」

「おや、つてことはもしかして『ウエリントンスクール』に行くんですかい？」

「…ええ、一年だけですがね」

窓枠に頬杖をつき、流れる車窓からの景色をぼうつと眺める。ここ、東海岸に位置し人口800万人を誇るアメリカ有数の巨大都市「ニューミニッツ」は戦前から繁栄をつづけ、今やアメリカ経済の中心となっている。と、同時にあの『世界恐慌』の中心地でもある。超高層ビルが立ち並び、通りは人と車で溢れかえっている。

僕が留学する予定の『ウエリントンスクール』は、ビルが立ち並ぶオフィス街に建てられている。日本で見たパンフレットは、確か校舎もガラス張りのビルだったはずだ。

「全く、オフィス街に学校を建てようなんて…『ウエリントン財閥』も狂ってますぜ」
「同感です」

素っ気ない返事をきっかけに、会話は完全に止まった。気まずい車内で、どうしようもなくスマホを開き、画面の中に逃げ込んだ。見慣れたホーム画面をスライドしていると、見たこともないアプリを見かけた。

(なんだコレ…)

『天秤』の様なアイコンをしたそれを、自分でダウンロードした覚えはない。何かのウイルスだったら怖いなと思い、即座にゴミ箱にぶち込んだ。

「お客さん！到着ですぜ」

運転手の声に気が付き、顔を上げる。

「どうも……支払いはこちらで……」

そう言つて、僕は財布の中からカードを引き抜くと、運転手に渡す。そして向こう側で何やら作業を済ませた後、カードを受け取り、そのままタクシーから降りた。それほどほぼ同時に、タクシーは「次の客を」と言わんばかりに、ものすごいスピードで発進した。

(殊勝なことだな……)

そう思いつつ、自分の目の前にはだかる巨大な「ウエリントンスクール・ドーム」の建物に圧倒される。一学校の「寮」でありながら、高級ホテルに引けを取らない外観、そして高さ。本当に僕はここで生活するのだろうか？と一抹の不安を抱いて、回転扉を通り抜け、ロビーへと足を踏み入れた。

ロビーは寮とは思えない程豪華な内装で、吹き抜けにシャンデリア。壁に備え付けられた暖炉に、赤い大きな絨毯。そして、革製のソファ。受付もある。

しばらくその豪華な内装に感動し、辺りを見回った後、受付に向かった。大理石のテーブルでできた寮の受付は、なんとも言えないエレガントな雰囲気漂わせていた。

「あの……今日転入予定の者ですが」

「お名前を伺つてもよろしいですか？」

「ええと…修也^{しゅうや} 井上^{いのみ}です」

僕は自分の名前を告げる。…井上 修也。

「シユウヤ様ですね。お待ちしておりました」

受付嬢の人はそう言うのと、部屋の鍵と思しき「キーカード」と、パンフレットを携え、カウンターの裏からこちら側に出てきた。

「それでは、お部屋にご案内いたします」

後に続くのと、三つ並んだ大きな扉のエレベーターの前に来た。

「こちらのドームは二十五階建てになっており、十階から二十三階が居住階となっております」

説明をしながら、エレベーターに乗り込む。そして、「二十階」のボタンを押す。

「二十四階がラウンジ、二十五階が展望階となっております」

(へえ、展望階なんて洒落てるなあ)

説明を聞いてる間に、エレベーターの到着を知らせるアラームが鳴った。

「それでは、シユウヤ様のお部屋は201号室になりますので…」

受付嬢の言葉を遮るように、エレベーターのドアがぱたんと閉まった。…仕方ない。ここからは手探りで部屋を探すしかないようだ…。

しばらく回廊の様な場所をぐるぐると彷徨っているうちに、ドアに「201」と書か

れた金のプレートが打ち付けられている部屋を発見した。

(ハア……くたびれるな)

貰ったキーカードをドアノブについでいる機械にかざす。すると、ガチャつという音と共に扉が開いた。ドアノブに手をかけ、静かに押し開ける。

まず目の前に広がってきたのは小奇麗なキッチンだ。この建物自体新しいので、キッチンも当たり前のようにピカピカだ。そして左手には……バスルーム。トイレとシャワールームは完全に分けられている。そしてキッチンの奥に広がるワンルームが、僕の居住空間だ。

キッチンやシャワーがあつて嬉しいものの、部屋はそこまで広くない。巨大な窓から外を見ることはできるが、どこを見てもビルの壁ばかり。なんだかそのうち飽きそうな景色だ。まあ、もう半分飽きてるけど。

家具は一通り揃っている。と言つても、ほんとに最低限のものだけだ。まあ、そのうち通販か何かで色々買い揃えれば問題ないだろう。

(もう遅いな……シャワーを浴びて寝るか)

バッグとスーツケースを部屋の隅に寄せると、寝間着は取り出し、明日学校に着ていく私服はハンガーにかけておく。そして、着ていた服を脱いで洗濯籠に突っ込むと、シャワーの蛇口をひねった。

\$\$\$\$\$\$\$\$

ベッドに寝転び、スマートフォンを開く。

(あれ…?)

ホーム画面には消したはずのアイコンが再び出現していた。

(なんだ?)

質の悪いウイルスに感染してしまったのだろうか…? 常日頃ウイルス対策ソフトを入れると言われていたが、無視を決め込んでいた。これは罰だろうか。仕方ないので、もう一度ゴミ箱に放り込む。

(明日、ソフトでもダウンロードしておくか…)

そのまま、意識が乖離し、深い眠りについた。